HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	帝国主義の統治理性（一）　ーチャールズ・キャニングとインド大反乱ー
Author(s)	中村，研一
Citation	北大法学論集，36(1-2)，287-313
Issue Date	1985-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/16479
Type	departmental bulletin paper
File Information	36(1-2)_p287-313.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論説

帝国主義の統治理性（一）

――チャールズ・キャニングとインド大反乱――

中村研一

まえがき
一節　統治者の形成
二節　確信の統治　以下本号
三節　統治目標の喪失　以下次号
四節　使命の終焉

まえがき

一八五〇・六〇年代は、英国人にとって帝国に対する意識の転換期であった。即ち、人々の帝国イメージが、白人移住植民地や必ずしも公的な政治支配を伴わない「自由貿易帝国主義」から、異民族支配という課題と正面から向きあった「植民地帝国主義」に、移行しはじめた変動期であったと考えることができる。この時期に帝国観と支配のあり方を、根底から揺り動かしたのが、一八五七年のインド大反乱であった。この大反乱の勃発は、英国のインド統治の危機であったが、のみならず英国人支配層によって英帝国全体の危機と受けとめられた。しかるに、英国はこの危機を比較的速やかに収拾し、インド統治を再建することに成功した。そのためインド人の間には、英国支配は打ち破りえない、という神話ができあがった。そして、インドは、大量の植民地官僚や軍人にとって、異民族統治の実地訓練場となり、一九世紀後半に、英国がアジア・アフリカ全域に異民族支配を拡大していく、膨脹の拠点となったのである。

大反乱を鎮圧する過程は、インド統治に大きな変化をもたらした。大反乱に先立つ二〇年間は、征服や併合によって英国領の版図が急速に拡大したが、大反乱後は、一転して領域的な拡大は停止し、安定した秩序の維持こそが、統治の中心課題となった。反乱の再発を防ぎ、秩序の安定化を求める英人支配者の願望は、「(インド人民衆の)鎮静化(tranquilisation)」[1]が大反乱後の一〇年間のインド統治政策の基本的なモチーフとなったことからも、うかがい知ることができる。

このことは視点を変えるなら、英国人統治者が、大反乱の結果、支配されるインド人の側からの反応に、大きく拘束されるようになったことを示している。ディスレイリー(Benjamin Disraeli)の「英国はいまや、東方の国々の人々

の世論にもとづき彼らのイマジネーションを通じてのみ行動することができるのである。」[2]という言葉は、この点を物語る。とすれば、帝国支配において、狭義の軍事戦略より、あるいは、個別的な経済利害よりは、被治者であるインド人の反応を予測しながら、効果的な秩序形成を主導していく政治指導こそが、統治の特質に大きな意味を持つに至ったのである。

本稿の目的は、大反乱の鎮圧と統治の再建とを、インド総督 (Governor General of India) として最高指揮したチャールズ・キャニング (Charles Canning) において、その課題がどのように認識され、その対応としていかなる政策が決定され、それが植民統治のありかたにどのような意味を持ったのかを分析することにある。換言すれば、大反乱への英国の対応がキャニングの政治指導によって決定される過程を照明することにより、大反乱後の英国のインド統治構造が組織化されていく動態の一端を考察することが、課題となる。もとより、インド統治の再建をキャニングの政策のみに帰することはできず[3]、また、キャニングが主導してつくりあげた統治構造も長く継続したわけではなかった。このようなキャニングを取り上げた理由は、彼が一九世紀中葉の英国人支配層の統治理念のある意味での典型的な持ち主であり、インド大反乱という英帝国の危機を収拾した支配様式とその構造的な要因とが、その限界を含めて、キャニングの指導の中に見いだされる、と考えたからである[4]。

(1) Metcalf, Thomas, *Aftermath of Revolt*, (Princeton U. P., 1965) Ch. 3, esp. p. 92. 参照。

(2) Blake, Robert, *Disraeli*, (London, Methuen, 1967) p. 376-77. に引用。

(3) インド統治の再建の過程で、支配の体系的な権威付けを行った文書「女王宣言」(Queen's Proclamation) を作成するイニシアチブをとったのは、インドの現場に在ったキャニングでもなく、彼をインド総督に選出したパーマストン自由党内閣でもなく、パーマストン内閣にかわったダービー保守党内閣であった。この「女王宣言」は、首相ダービー (Edward Geoffrey Smith Stanley, the 14th Earl of Derby) の長子スタンレー (Edward Henry Smith Stanley, the 15th Earl of Derby) インド担当相によって起草

され、ヴィクトリア女王（Queen Victoria）がそれを修正し、さらに首相ダービーが推敲してできあがったものであり、キャニングはこの作成過程には参与していない。しかし、本稿の課題は、英国のインド統治の歴史過程を辿ることではなく、インドの統治構造の特質をキャニングを通じて考察することにあるのであり、「女王宣言」の作成が保守党と女王の手でなされたという事実よりも、キャニングが「女王宣言」を統治の現場の観点から支配の手段としていかに活用したかに着目することが重要になる。キャニングは後述のように「女王宣言」を一七以上の現地語に翻訳して発布したが、いくつかの点で翻訳の困難に苦しみ、また、キャニングの政策と「女王宣言」の不一致がある点を憂慮していた。そして、長文の「女王宣言」に対してキャニング自身が作成した簡結な「宣言」を並行して発布したのである。

Maclagen, Michael, *'Clemency' Canning*, (London Macmillan, 1962) pp. 224-29. 参照。

（4）チャールズ・キャニングに関する基本資料はヘアウッド村領地記録所・インド省図書館・インド国立文書館などに収められている、キャニングと本国との間、及び、キャニングとインド政府の文官・武官との間に交わされた手紙である。本稿執筆のために筆者が閲覧した資料は、インド省図書館とインド国立文書館の関連資料のごく一部にすぎず、それも下記の先行業績に導かれて参照したものが多い。従って、以下手紙を引用する場合には、発信者→受信者・日付（下記の著作に引用されている場合にはその）著者の姓と引用された頁数のみを記すことにする。チャールズ・キャニングに関連する資料の詳細については、下記の Michael Maclagen の著書の文献解題に適切に要約されている。

① Maclagen, Michael, *'Clemency, Canning: Charles John, 1st Earl Canning, Governor-General and Viceroy of India, 1856-1862*, (London, Macmillan, 1962).

「キャニング卿自身に出来るかぎり語らせることを第一の目的とした」（序文一頁）本格的な伝記であり、英・印の関連資料を丹念に付合わせ、キャニングの八〇巻に及ぶ莫大な手紙を駆使した力作である。キャニングは在任当時、必ずしも世評が高いインド総督ではなかったが、彼が批判された個々の論点を、この伝記では資料に沿って綿密に再検討し、多くの点でそれまでのキャニングの評価を正すことを試みている。

② Fitzmaurice, Edmond, *The Life of Granville: George Levenson Gower, Second Earl Granville, 1815-1891*, (London, 1905).

キャニングの幼年時代よりの親友であり、キャニングのインド総督在任中ロンドンにおいて彼の政策を代弁し擁護し続けたグレン

ヴィルの古典的なスタイルの伝記であり、キャニング夫妻とグレンヴィル夫妻との間の重要な手紙が数多く収録されている。

③ Pemble, John, *The Raj, The Indian Mutiny, and the Kingdom of Oudh, 1801-1859*, (Delhi, Oxford U. P., 1977).
インド大反乱の一大中心であったオードにおいて、イギリスの現地統治者とインド人支配層との関係を分析した歴史書で、大反乱の発生と鎮圧の過程を詳細に検討しており、現地のイギリス人指揮官とキャニングとの交信が数多く引用されている。現場指揮官の視点から見た、キャニングの決定に対する批判的な論点が明らかにされている。

④ Metcalf, Thomas, *Aftermath of Revolt*, (Princeton U. P., 1965). Metcalf, Thomas R., *Land, Landlords, and British Raj: Northern India in the Nineteenth Century*, (U. of California P., 1979).
前者はインド史における一八六〇年代の分析の空白に着目し、大反乱後の英国の政策変化を、政策領域別に追ったパイオニア的な著書である。キャニングの資料は①の著者に負ったものであるが、キャニングのリアリズムを強調する解釈をとっている。
後者はイギリスの政策変化とインド農民の対応を詳細に分析したもので、キャニングの政策決定・現地での執行過程・農民の反応の三者の間に大きなずれと時間的な遅れがあった点が分析されている。(以下 Metcalf, op. cit. は前者をさす。)

一節 統治者の形成(1)

チャールズ・キャニングは、一八一二年一二月一四日、ジョージ・キャニング (George Canning) の三男として生れた。父ジョージ・キャニングは、周知のように、一九世紀初頭の英国における、最も重要な外交官・政治家の一人であり、とくに一八二二年から死去する二七年までは外相と首相を歴任し、英国の政治を指導した。

キャニング家の祖先は、ブリストルの名望家の家系といわれているが、一七世紀には北アイルランドに移住している。チャールズ・キャニングの祖父は、ロンドンに出て法律などを学んだが成功せず、一七七一年に妻と一歳の息子ジョージを残して死んだ。その時には、葬儀費用にこと欠くほど零落していた。そのためジョージの母は、地方巡りの端役をつとめる女優として舞台に立ち、後に俳優の一人と同棲して七人の子を成している。他方、ジョージは、彼の叔父で口

ンドンの富裕な商人ストラトフォード・キャニング（Stratford Canning, 後の著名な外交官の父）に引きとられ、その支援のもとに、当時のエリートコースであったイートン校からクライスト・チャーチ（オクスフォード大学の一カレッジ）に進んだ。ジョージ・キャニングは、政治的な野心と情熱を持ちながら、政治家の道をあゆむ機会を狙い、小ピット（William Pitt）に接近した。そして、彼の推薦によって、一七九四年に衆議院入りに成功した。[2]

一八世紀末には、衆議院においてジョージ・キャニングのようなミドル・クラス出身者が、比重を増しつつあったが、それは未だ少数派であった。その議席の多くは、ジェントリー、爵位を継承する以前の貴族、あるいは、二・三男であるなどの理由から爵位を継承しえない貴族の子弟で占められていた。そのため、ミドル・クラス出身者は、たとえ有能であっても、重要な役職につき、成功するためには、数多くの障害を乗り超えなければならなかった。そして、たとえ議会の演説、議会外の活動や健筆によって名をあげ、有力政治家から引き立てられて、役職を得ることはできても、当時の支配層の情報交換の場であり、人物の評価が決定される政界サロンや貴族の人脈の中に、受け入れられることは至難であった。ジョージ・キャニングも、外交担当の国務次官、海軍軍需相、外相をつとめ、彼の演説や政治手腕は、高い評価をうけていた。しかし、そのような彼でさえ支配層には異和感をもって迎えられたのである。

彼は、母にあてた手紙に政界サロンで孤立を強いられる窮状を、次のように訴えている。

「母上には、私が、たえずびくびくしている他所者であることを、なかなか御理解いただけないでしょう。私は、ほとんど会話をかわすことができないのです。支配者の言葉を、それを話せることが良いことなのか否かは別ですが、ともかく話せないのです。この言葉が、あやつれないために、私は尊敬される人物でありたいという願いを捨てなければならないのです。[3]」

その半面、彼の目は庶民に向けられていた。チャールズが生れた一八一二年には、ジョージ・キャニングは新興都市

リバプールの大商人ジョン・グラッドストン (John Gladstone, 後の首相ウィリアム・グラッドストンの父) らから強い要請を受け、そこに選挙区を移している。以前より彼は、「世論」に期待をかけ、一六八八年以来、世論は小人から巨人にまで成長をとげ、「あらゆる政治指導者の行動や言論を監視し、支配し、統制するに至った」[4]と述べていたが、リバプールにおいて、彼は「多くの民衆と直接に接触し、歓迎される」[5]ことの喜びを味わったのである。

それに対して、二代目の政治家である息子チャールズ・キャニングは、生れながらにして支配層の一員であった。幼年期のチャールズの成長過程は、父ジョージが晩年に至ってようやく権力の頂点を極めていく過程に他ならない。チャールズは、父の期待の息子として父の外遊や重要な政治家との交際に度々付き添っているが、それは、父があれほど苦労した「支配層の言葉」を自然に身につける環境に他ならなかった。父ジョージは、素姓の知れぬ旅芸人の息子であったために、政界の厚い壁に直面し、妻 (チャールズの母) の類縁をたよりにしながら、ようやくに政界の地位を得た。しかし、息子チャールズ・キャニングには、すでに首相の息子として、その交友や類縁関係が、支配層全体に張りめぐらされていた。祖父が死んだ時、父ジョージは身なし子同然であった。それに対し、父ジョージ・キャニングが首相在任中に死去した時、一四歳のチャールズは、二人の兄が夭逝していたため、喪主として、皇族に後見されながら、父の葬られるウェストミンスター・アベーに立ったのである。

チャールズ・キャニングが、後にインド総督としてインド大反乱という危機を切り抜けることができた要因として、支配層の要所に、彼を無条件に支持する人が存在していたことは軽視しえない。

まず、第一に、外相・首相を歴任した父ジョージと、父の従弟である外交官ストラトフォード・キャニング (Stratford Canning 子) との二人がつくりあげた人脈と名声の遺産は、測り知れない。チャールズ・キャニングは、彼の最大の盟友で、彼のインド政策のロンドンにおける代弁者の役割をはたしたグレンヴィル (George Leveson-Gower, the 2nd

Earl of Granville) と幼年時代から貴族院入りするまで、ほとんど同じキャリアを歩んだが、キャニング家とグレンヴィル家との親交と盟友関係は、父ジョージの世代に築かれたものであった。また、キャニングのインド総督時代に、彼の最も重要な部下であったフリア (Bartile Frere) は、父ジョージのイートン校時代からの友人の甥であった。

さらにチャールズ・キャニングは、このキャニング家の後継者として注目されていた。例えば、一八五一年に保守党のスタンレー一四代ダービー伯爵) は、組閣を試みた際に、キャニングに外相に就任するように交渉し、ピール党 (ピーライト) に属するキャニングから拒絶されているが、その際スタンレーは、外相候補として、チャールズかストラトフォード・キャニングのいずれかを想定していた。[6] このことは、スタンレーが、チャールズの能力を評価していた点もさることながら、キャニング家の名声と人脈を重視していたことをうかがわせる。

第二に、妻とその類縁の役割も父と子で対照的である。ミドル・クラス出身者が政界で身を立てるには、結婚は支配層に接近する貴重な足掛りであった。父ジョージ・キャニングは、政治資金の重要な一部を妻の持参金に求め、妻の類縁に助けられて官職を得て、政治家として抬頭した。[7] それに対して、チャールズは、政治家として出発する際には、そのような引き立てに依存していない。彼は、父と同じ二四歳で衆議院に議席を得るが、それはピール (Robert Peel) の側からキャニングに政界入りを要請された結果であった。[8] しかも、衆議院入りして一年後、キャニングは母の死によって母の爵位を継承し、はやくも貴族院に移ることになった。チャールズの妻は、長く駐仏大使をつとめたステュアート (Charles Stuart) の娘シャーロット (Charlotte Stuart) であった。ステュアート家の人々には、政界人は存在しなかったが、ただし妻シャーロットが、かつてヴィクトリア女王の侍従女官 (Lady of Bedchamber) をつとめたことは、後にキャニングに微妙に影響したと思われる。[9]

第三に、チャールズ・キャニングが、イートン校とクライスト・チャーチという父と同様の教育過程で、形成した交友関

係に注目する必要がある。この政治家への登龍門――クライスト・チャーチは、一九世紀に九人の首相を出している――ともいえるエリートコースにおいて、父ジョージが経験したのは、どちらかといえば孤立感であった。彼の、学生時代の交友関係は、広いわけではなく、また、支配層からの差別感に反発を持ち続けた。それに対して、チャールズにとって、この教育環境は自然なものとして受け入れられた。そればかりではなく、ここにはチャールズ・キャニングの同世代に、一九世紀中葉の英国の支配層を形成する一群の若者たちが結集していた。キャニングは、グラッドストン (William Gladstone)、グレンヴィル、ペラム・クリントン (Henry Pelham-Clinton, the 5th Duke of Newcastle)、カードウェル (Edward Cardwell)、ハーバート (Sidney Herbert) らとクライスト・チャーチで生活を共にした。さらに、特筆すべきことはクライスト・チャーチにおける三名の同窓生、ダルフージー (James Andrew Broun, the 10th Earl of Dalhousie)、キャニング、エルギン (James Bruce, the 8th Earl of Elgin) が一八四七年以来一六年間、三代連続して、インド総督の地位を独占したことである。さらに、キャニングが総督に就任した時、インド統治の第三の地位であるマドラス総督 (Governor of Madras) であったハリス (George F. R. Harris) も、彼とクライスト・チャーチで顔見知りの間柄であった。

これらの若いエリートの多くは、一八三二年の選挙法改正後の衆議院に議席を得ることによって、政治家としてスタートした。そして穀物法をめぐる論議ではピールを支持し、相前後しながら政府の官職について手腕を競っていった。彼らは一九世紀前半の「改革の時代」の申し子であって変革に大きな抵抗感を持たなかったが、同時に、大英帝国の統治者であるべく育てられた。一九世紀を通じて、大英帝国は一貫して海外植民地を拡大し続けたため、世界に広がる権力にふさわしい有能な統治者を必要としていた。とくに、一九世紀の中葉までは、輸送・通信手段が著しく限定されていたために、海外の任地において責任ある決断を下す自立的支配者が不可欠であった。この新興世代の中で、野心と情

熱を持った人々は、進んでこの植民統治者の任務を選んだが、その中でも最も重要な官職が、インド総督であった。

このように、チャールズ・キャニングは、父の政治的遺産と母の貴族的資産を継承した二代目の政治家として、支配層の価値意識や行動規範を内面化させていった。彼の支配層との一体感は、彼の父ジョージ・キャニングの支配層や民衆に対する意識と、鋭い対照を示している。

ジョージ・キャニングの中には、政治的に成功した晩年に至るまで、貴族とジェントリーの政治的な特権に対する挑戦の姿勢が、色濃く残っている。とくに、彼が庶民であることの人的な象徴であった母に対する手紙の中で、彼は、しばしば、支配層の無能を嘲り、貴族の儀礼に皮肉をとばし、その差別的な意識に対して怒りを爆発させている。[10] 彼は、自分自身の能力に自信を持つだけでなく、それを行動に顕わし、ライバルであったカースルレイ（Robert Stewart Castlereagh）への対抗意識を過剰なまでに表現し、また、他の政敵に対しても常識をこえた攻撃を行うことさえあった。このような彼の行動は、敵をつくり、彼自身の政治的な成功をさまたげる一つの要因となった。その半面で、彼は民衆への共感を抱き続け、逆境にある人や不遇の人を親身になって世話をした。そして、衆議院の人間であることに政治家としての意義を感じ、議院の外の民衆の要求に鋭敏で、彼の選挙区の選挙権を持たない民衆と接することを楽しんだのである。また、彼は、インド統制委員長、外相、首相などを歴任したが、その仕事ぶりは、効率的な統治に熱中するというよりは、人間関係の駆引や大局的な判断に重点を置いたものであった。[11] このような点を考えるならば、ディスレイリーがジョージ・キャニングを情熱に溺れた民衆出身の議会政治家として高く評価し、彼を自分の政治経歴の先駆者とみなしている点は、理解しうるところであろう。

ところが、彼は、息子チャールズにミドル・クラスの価値観を継承させるよりは、むしろ、貴族的な支配層の倫理観にもとづいて養育した。チャールズ・キャニングは、父と異なり、支配層対平民という対立軸から政治を判断していた

とは考えられない。彼は、支配層の慣習に異和感を抱かず、例えば、一八五八年の「女王宣言」によって初代のインド副王（Viceroy）に就任して、インド支配に数々の王朝的ともいえるような制度や儀礼を導入してゆくが、彼は、それに何のためらいも屈折した心情も示していない。また、彼は、支配層の中で民衆から隔離されて育てられた。そして、衆議院議員としても一回のみの選挙を経験したにすぎず、民衆の生活に直接ふれる機会は、ほとんど存在しなかった。そのため彼は世論の動向には超然としていた。また、貴族院では、有力な討論者の一人ではあったが、人々の記憶に残るような名演説はない。また、平民出身の部下たちの人心を収覧する能力を発揮したわけでもなかった。その点で、彼は民衆政治家に必要な資質を持ってはいなかったといえる。しかし、彼は、おどろくべき多様な問題に対して的確にその核心をつかみ、目配りのきいた冷静な判断力を示し、組織を動かしていく能力を発揮したのである。

チャールズ・キャニングは、政治家として順調な道を歩みはじめた。一八四〇年代前半には、ピールの指導下で外務次官、森林庁長官、枢密顧問官を歴任した。そして、ピールの死後もピール（ピーライト）党の立場を貫き、保守党から外相候補に擬せられながら、就任を拒否し、一八五二年のパーマストン内閣で郵政庁長官（Postmaster General）をつとめ、一八五六年にインド総督に任命されたのである。

（1）チャールズ・キャニングの略歴については主として Maclagen, op. cit. を、ジョージ・キャニングについては、主として、Hinde, Wendy, *George Canning*, (London Collins, 1973), を参照した。

（2）ジョージ・キャニングは、二男（チャールズの一〇歳上の兄）を、ウィリアム・ピット・キャニングと名付けている。

（3）Hinde, op. cit., p. 430.

（4）*Ibid.*, p. 463. に引用。

(5) *Ibid.*, p. 262. に引用。なお、当時のリバプールの人口は約一〇万人で、有権者は数千であり、ジョージ・キャニングの得票数は一六三一票であった。

(6) Maclagen, op. cit., pp. 14-15.

(7) ジョージ・キャニングにとって妻の類縁は、彼の政治的経歴にとって極めて重要な人々を含んでいる。まず、妻の姉は、小ピットの盟友でその死後内閣を継承したポートランド (William Cavendish Bentinck, the 3rd Duke of Portland) の息子に嫁していた。また、妻は、小ピットの有能な補佐役であったダンダス (Henry Dundas) の姪であった。ジョージ・キャニングが小ピットのもとで抬頭していく際、彼を引き立てたのはダンダスであり、彼が最初に外相になるのはポートランド内閣である。

(8) Maclagen, op. cit., pp. 9-10.

(9) ヴィクトリア期における女王の意向は、首相・外相など重要な人事や外交政策・帝国政策について、無視しえない要因となっている。妻が女王の侍従女官であり、親友グレンヴィルが女王の寵臣であったことは、チャールズ・キャニングにとって有利であった。

(10) ジョージ・キャニングの母が地方巡りの芸人であることを理由に、彼が首相にふさわしくないという意見もあった。Hinde, op. cit., p. 448.

(11) *Ibid.*, pp. 288-92, 332-33, 430, 464.

二節　確信の統治

——カルカッタ・戦場・ロンドン——

「恐りの中で行動すべからず。」

熟慮と賢明さを命じた父ジョージ・キャニングのこの訓戒[1]は、チャールズ・キャニングの統治者としての資質を最もよく表現しており、大反乱に対処したキャニング総督の第一の行動原理となった。

キャニングは、大反乱の発生を、まるで予期していたかのように平静に受けとめた。そして、反乱の報によりカルカ

ッタの人々がパニックに落ち入っている最中に、あえて反乱発生以前と同じように振舞い続けた。総督の衛兵をインド人から英国人に変えるべきだ、という部下の進言を退け、キャニング夫人の馬車によるカルカッタ郊外への散歩も、従来とかわることなく続けさせた。そればかりか、ヴィクトリア女王の誕生日を祝う総督主催の舞踏会を、予定通り実施させさえしたのである。[2] この冷静さの演技は、悠長な態度と受取られ、カルカッタ首都圏まで反乱が拡大することにおびえたインド在住英国人たちの間に、総督は事態を深刻に受けとめていないのではないか、という不満を呼びおこした。カルカッタの欧人居住地区には、反乱軍の襲来に関する流言蜚語が飛びかい、武装自警団が組織された。彼らは、敵の幻影におびえ、一夜にしてカルカッタの街路にバリケードを築上げる、という動転ぶりを示した。さらに、このような英国人の動揺と緊張とは、カルカッタのベンガル人に感染した。多くのベンガル人は猜疑の目で英国人の挙動を注視し、英国人がやがて無差別な復讐を行うのではないか、と警戒していた。増援のために英国の軍艦がカルカッタ沖に到着し、礼砲を放った時、港のベンガル人たちは、イギリス人側が報復のために都市攻撃をはじめたものと誤解して、次々と海にとびこみ逃げまどったという事件は、ベンガル人の側の恐怖心を物語る。[3] カルカッタ在住の英国人たちが、前後を失って動揺し、老婦人たちまでが剣を腰に差して街を出歩くという異常な警戒心を、キャニングは、ヴィクトリア女王に宛てて次の様に報告している。

「立派な模範を示すべき多くの人々の間ですら、理性を欠いて、相手を選ばず復讐しよう、という考えがひろまっております。このような有様は、同朋として羞恥の念を禁じえません。[4]」

ここで注意すべきなのは、キャニングが統治のために必要な冷静な政治的配慮をインド在住の英国人に対して要求しており、しかも彼らを支配者とみなし、彼らに治者の倫理感が欠けているという観点から批判している点である。さらにキャニングは、ロンドンの東インド会社統制委員長ヴァーノン・スミス (Robert Vernon Smith) にあてた手紙の中

で、「インド在住英国人が恐怖に動転し人種的復讐心に燃えることは、広い国家的見地から見て、敵をつくる行為に他ならず、……単に恥ずべきばかりでなく、災をもたらす」[5]と非難している。ここでも恥ずべきなのは、なによりまず「統治者」の動揺であった。

「セポイ達をきらう事では英国人に劣らない現地人商人や欧人民間人の方が常識と平静さを示している。それに対して政府の役人や高官たちがおじけづいて右往左往し、恐怖心にかりたてられ、それに皆が付和雷同している。[6]」

彼の論理を要約すれば、統治者の動揺は異民族支配の崩壊を、自ら招きよせる行動に他ならない。実際、英国人の不安感は、すでにカルカッタのベンガル人社会に感染し、一層の混乱を引きおこしている。しかも、反乱鎮圧に兵力を集中したためカルカッタの治安にまわせるような軍隊の余力は全く存在しない。とすれば、北インドの反乱発生地域からかなり距離があるカルカッタで、統治者である英国人が行うべきことは、警鐘をならして、危機感を徒らにあおりたてることではないはずである。むしろ、英国人は、カルカッタでは、全く平常通りに行動して、英国の統治は揺ぎないという印象を、ベンガル人にあたえなければならない。このように彼は判断したのである。そして、キャニングは、他の英国人たちに統治者として「賢明であれ」と繰り返し説いた。なぜならば、長期的に見ても「この巨大なインドで、英国人がここ数世代のうちに一握り以上の存在になる可能性は皆無」なのである以上、「(在印の)英国人とその支配層が、インド人の全階層に不信感を持って、彼らに汚名を着せ、排斥するような措置をとれば、英国は全く無力になる」ことは容易に理解されるからである。とすれば、「英国によるインド統治が不可能になってしまう危険を避けるため」には、「賢明であること」が唯一の選択肢であったのである。[7]

「賢明」であるとは、短期的には、まず、なによりも反撃への拠点として、首都カルカッタとその周辺に、反乱や動揺が波及するのを食い止めることを意味した。そして、その次に、ベンガル首都圏のインド人たちから支持を調達する

ことが必要になる。なぜなら、海路カルカッタに到着する増援部隊を、反乱地域である北インド内陸部に送り込むためにも、また、反乱地域に展開した英国軍に通信し補給するためにも、広大なベンガル・ビハールの空間を通過しなければならないからである。従って、反乱の平定のためには、通過地域の住民が敵対的にならないことが不可欠であった。さらに重要なことに、反乱鎮圧のための経済的基盤は、このベンガル首都圏の徴税能力にほかならない。キャニングは、反乱の発生直後、彼の周辺がインド人一般に対する敵愾心に覆われている時、まず、平定計画のための財政的な計算を行っている。[8] その結果、ベンガル一帯の地主・有力者・商人の支払う税金こそが「ベンガル首都圏の繁栄と平和の最も重要な要であり、ひいては、英国統治が永続しうるか否かの鍵を握る存在であった」[9]と判断した。しかも、キャニングは、彼らは英国の統治の受益層であることを見抜いていた。つまり、英国の統治は、「現地人たちの友愛とはとてもいえないまでも、好意的な態度と、彼らが良く理解している彼ら自身の利益」とにかけられていたのである。[10] とすれば、これらの現地人たちから反感を買ったり、彼らを敵にまわしたりする行動は是非とも避けなければならなかった。

しかしながら、彼の冷静さは例外であった。英国人の興奮と憤怒は、戦闘の現場ではキャニングの統制をこえ、英国の本国においても国民的な聖戦意識にまで高まろうとしていた。特に、ガンジス中流域の英国側の拠点カウンプール(Cawnpore)で、英国軍が全滅し、英人子女が虐殺されたというニュースが伝えられるや、英国人社会にはインド人に対して、「裏切り者」のみならず「残酷」「野蛮」のイメージがつくられ、「カウンプール!」は、英国人の復讐の叫び声となった。英国側が、孤立して包囲され、八九日間の籠城戦が続いたラクノー(Lucknow)攻防戦に参加した一志願兵は、後に次のように述べている。

「私はしばしば復讐を考えることが正しいか否かについて考える。神は『讐仇は我にあり、汝に再び返報があろう』と説かれる。私は自分の意識を安めるために、私も神の一個の道具にすぎないと考えてみた。……いや、絶対にだめ

だ。……もし、私に権力があれば、私は決して反乱者の罪を許さない。それがたとえ五〇年かかろうとも、私は捕えたセポイをすべて絞首刑にしてやりたい。英国は、その娘たちに加えられた侮辱と野蛮を決して許すことがないのだ、ということをインド人に思い知らせてやりたいのだ。」[11]

このラクノー攻防戦の動向は、全英国圏の関心の焦点となり、英本国の村々の教会では、次々と孤立した英国人の救出を願う祈りが捧げられた。カルカッタにおいて三〇年間、布教と啓蒙の活動を続けてきたスコットランド人宣教師ダフ(Alexander Duff)は、この大反乱を神が英国人に下した試煉と意味付けた。つまり、神がインドを英国の手に下した「誓約の偉大な目的、即ち、魔王の帝国の滅亡を、英国人にはっきり感得させるための」神の御心のあらわれなのであると。[12]

反乱鎮圧のための英国人の部隊は、復讐心に燃えて、ガンジス流域を疾走した。村全体が焼きはらわれ、住民のすべてが絞首されるような、仮借ない殺戮も生じた。「悪魔の嵐(デビルズ・ウィンド)」としてインド人から形容されたような迅速な行軍が、流血を伴いながら強行された。この英国人の憤怒は、それまで数多くのインドでの征服戦争に立会った前線指揮官の目にも、前例のない異様なものに映っていた。パンジャブ方面の反乱鎮圧の総責任者であったジョン・ローレンス(John Lawrence)は、インド征服に数々の武勲を立てた歴戦の勇士であったが、彼でさえ、英国人の戦闘を次のように評している。

「我々の本性のうちの暗い激情(ヘル・パッション)が呼びおこされた。……戦闘は反乱兵に対してのみでなく、多くの場合、暴徒一般に対しても絶滅戦になり、……人種戦争になっている。」[13]

この「人種戦争」に英国人士官を駆立てたもう一つの要因は、自分の部下や支配下の住民の目に見えない敵意に対する恐怖心であった。反乱が拡大していく過程で、司令部はインド人部隊の武装解除を指令したが、昨日まで忠実であっ

たインド人の部下たちを信頼して、上部の命令に反対し訂正を求めた英人士官たちが、その部下たちに殺害される事態も多かった。そのため、インド人の忠誠は、現在はいかに確実に見えようが、明日は裏切られるか定ではない、という猜疑心が、英国人士官には植付けられた。(14)

ジョン・ローレンスの指揮するパンジャブでも、ガンジス中流域での反乱の報が伝わるや、インド人兵士たちの心は上官の英国人に対する忠誠と同朋である反乱軍兵士に対する共感との間で、大きく動揺しはじめた。それに対して、ローレンスは、パンジャブ駐留軍の中の動揺分子に対して、反乱の先手を打って、公開銃殺や武装解除などの粛清を強行した。この恐怖政策が徹底されていく心理的なメカニズムをローレンスは、次の様に述べている。

「我々が、自分たちの安全を確保するためにとる一つ一つの措置は、セポイ正規兵に対する打撃となる。セポイはその事を感じ取っており、彼らの側でも抵抗の準備を一層すすめていく。従って、我々はセポイを解隊し、破壊しつくすまで粛清を続けなければならない。そうしないならば、彼らは反乱をおこし士官を殺害するであろう。(15)」

この恐怖の相互エスカレーションこそ、キャニングが、最も避けたいと考えていた事態に他ならない。彼は、恐怖こそがインド兵を反乱に踏み切らせる要因である、と判断していた。

「最も対処しがたい困難は、未だ規律の崩壊していない部隊が恐怖心に血迷ってしまう状態なのだ。彼らセポイが、カーストや宗教を失うのではないか、という恐怖。自分の仲間のセポイから恥ずべき人間だと見下されるのではないか、という恐怖。そして、ヨーロッパ人部隊が、彼らを反乱に加わった仲間と同一視して、自分たちを急襲し血の粛清を行うために、どこかに集合しているのではないか、という恐怖。(16)」

この恐怖心がインド全域に拡大していくことを、何とか断ち切る必要があった。そのためにキャニングは、未だ反乱が拡大にむかう勢を示している時点で、全軍に向けて、報復的殺戮を禁止する訓令を発した。その中で彼は、(1)、実際

に反乱側に投じた部隊や上官を殺害したインド人部隊と、単に武装解除されたにすぎない部隊、あるいは、反乱に関与していない部隊との峻別を命じ、(2)、反乱者の処罰は、法による裁判にもとづくことを命じて、復讐による殺戮を禁じ、(3)、不必要に村を焼きはらうなどの無差別攻撃を禁じた。[17] この訓令の趣旨は、憎悪と不必要な殺戮が、インド人兵士を一層反乱の側に追いやり、さらに、無差別な攻撃がインド民衆を敵にまわす事態を懸念したものであった。さらに、キャニングは、反乱軍の側が、無秩序で、時として略奪などを働いたことと対比させ、反乱鎮圧軍は、厳正な規律をもってインド人民衆に接することを期待した。

「抵抗を打ち負すことが、第一の責務であるが、しかし、いったん抵抗が終息したならば、思慮深い公正さと、平静と忍耐づよい理性こそが、動揺を鎮静させるのだ。[18]」

こう述べてキャニングは、軍事的勝利の後は、征服者ではなく、統治者として行動するよう全軍に要請したのである。彼の目標は、インドにおける英国統治の政治的再建であり、その目的達成の手段として、限られた軍事力をどの地点に投入するか、という思考様式が決定を支配した。そのため政治的な秩序の回復を至上命令とするキャニングと、軍事的な合理性にもとづいて勝利への最短距離を狙った戦略を選択しようとする前線指揮官との間で、作戦決定上の対立が生じた。

第一の対立は、アフガニスタンに接する北西辺境の拠点ペシャワ (Peshawar) を放棄すべきか否かに関する、パンジャブ駐留軍の責任者ジョン・ローレンスとキャニングの間の対立である。

ベンガル中流域で反乱が発生した時、ベンガル軍の主力部隊は、ローレンスの指揮の下に、北部パンジャブ一帯に駐留していた。[19] そのため、英国側の緊急の課題は、まず、パンジャブ駐留軍に反乱が波及することを未然に防ぎ、次に、このパンジャブ軍からできるかぎり多くの兵力を、反乱側の拠点となった旧都デリーを攻撃するために派遣することで

あった。もし、パンジャブ軍に大規模な反乱が生じたとすれば、大反乱全体の鎮圧は当分不可能になるだろう、と英国人指導者たちは判断していた。

ローレンスは、パンジャブ軍への反乱の波及が先か、それとも、それより先に反乱側の拠点デリーを陥落させることができるか、という時間の勝負だと考えていた。なぜなら、パンジャブから近いデリーに、パンジャブ軍兵士の同朋たちが反乱政権をつくって叛旗をかかげている間は、パンジャブ軍の動揺はおさまりえないからであり、ローレンスは、デリー政権を早期に崩壊させないかぎり、パンジャブでの反乱の発生は時間と確率の問題だと、判断していた。したがって、デリーの早急な奪還がなによりも重要であると考え、一方で、動揺した兵士の粛清を強行しながら、他方で、英国側に忠実な部隊を次々とデリーに派遣していった。しかし、忠誠の確信できる部隊をデリーに送り出すことは、忠誠の疑わしい部隊のみがパンジャブに残されることを意味し、段々とパンジャブ駐留軍の軍事統制力を低下させてしまい、反乱の可能性を高めていくことになった。このジレンマに直面したパンジャブ軍指導部には、焦燥感が高まり、戦略をめぐって論争が生じた。その大勢は、戦闘を英国側に決定的に有利な方向に向けるために、デリー攻撃に全力を集中しよう、という方向に傾いた。そこで、ローレンスは、それを補う措置として、反乱とは直接に関係のない北西辺境ペシャワの兵力を一時的にパンジャブに撤退させることを考え、ペシャワの一時的な放棄を、キャニングに進言した[20]。

それに対するキャニングの回答は、「最後までペシャワを確保せよ」[21]であった。その理由は、もし「英軍の撤退」という事態が、インド全土に知れわたると「英国統治の至高性に対する確信が、間違いなく揺り動かされてしまう」[22]という点であった。キャニングの視野は、形勢を見守っている藩王などにまで、及んでいた。

「(ペシャワ) 放棄によって捻出された軍事力から、我々が現実の利益を引き出す前に、『英国撤退』の波及効果は広く感受されてしまうだろう。もしも、デカンで、あるいはバローダで反乱が生じ、我々の側に(藩王国などの)現地政

権を引きつけておくことができなければ、我々の地位は絶望的なものになってしまう。」[23]

キャニングは、デリーの反乱側の政権がムガール皇帝を擁して、正統な支配者として体裁を整えていることを重視していた。反乱軍が席捲した北インド一帯では、各地の伝統的な支配者や地方有力者たちは、反乱軍が接近するにつれて態度決定を迫られ、反乱側に投ずるか、英国側に立つかという旗幟を鮮明にしていた。ところが、反乱軍が近づかなかった地域の藩王や有力者たちは、その大部分が情報の収集につとめ、情勢を観察しながら、慎重に態度決定を保留していた。このような人々に対してデリー政権から反英側に加わるように、働きかけが行われていた。このような外交戦という視点からすれば、形勢を凝視している各地の勢力に「英軍撤退」という政治的衝撃を及ぼすことは、明らかに愚策であった。換言すれば、キャニングは、すでに反乱が発生した北インドやパンジャブで、新たな軍事抵抗が生ずることの政治的な意味は、低く見積っており、それ以外の地域で反乱側に投ずる雪崩れ現象が生ずる可能性を懸念していた。

デリーは、ペシャワの放棄なしに、英国側の手に落ちた。その後、キャニングは、ラクノーの攻略に全力を集中した。ラクノーは、反乱が最も根強かったオード(Oudh)地方の首都である。このオードは、キャニングがインドに着任する直前、前総督のダルフージーによって併合された地域であり、この併合によって、ラクノーの王室や土地貴族タルクダール(Talukdar)の強い不満が醸成され、さらにベンガル軍団の中軸をなしていたオード出身のセポイの中にも反発が生れるなど、大反乱の重要な焦点の一つであった。そのためオードにおける反乱は、単なる兵士の軍事抵抗にとどまらず、この地域の支配層をまき込んだ地域反乱に近いものになった。すでに述べたように、このラクノーの英国総督代表の館では、英国側は婦人や子供を含めて三ヵ月に及ぶ籠城戦を展開し、英国側の全力をあげた救出作戦によって、かろうじて救出された。しかし、この作戦は、英国人の救出のみを目的としたものであり、その後もオード全域の制圧やラクノーの確保には、程遠い軍事情勢であった。そのため、英インド軍司令官コリン・キャンベル(Colin Campbell)

は、ラクノーをいったん放棄し、デリーとオードとの間に広がるロヒカンド (Rohilkhand) 地方を制圧し、次いで、オードに手をつけていく戦略をたてた。キャンベルは、キャニングにラクノーは地理的に孤立しやすく、オード一帯に散在する無数の反乱側の拠点の真直中に、限られた兵力を展開することは危険であると力説した。[24]

それにもかかわらず、キャニングはラクノーの確保を命じた。その理由は、「インドにおけるすべての目が、かつてデリーに向けられたように、今やラクノーに向けられている」[25]からであった。オードに対する英国の併合が、大反乱の発生の一要因であることは、すべての人が一致して認めていた。しかも、ラクノー王室は、併合の取消を求めて、様々な活動を行っていた。そのために、インドの有力者たちは、ラクノー王室の運命を注視していたのである。

「王の存在と彼の求めている地位が（同様の地位にある他の）英国統治に服さない土着権力の目には重要なものと映っている。だから、オードにおいてこそ、我々は成功するか失敗するかが決定されるのだ。」[26]

また、キャニングは、「逆説的に聞えるかもしれないが、ラクノーがオードの中心で首都であるからこそ、また、我々がたった二年しか確保しえなかったラクノーであるからこそ、我々が権力をうちたてることが大切なのだ」[27]とも述べている。つまり、最も支配のむずかしいラクノーの覇者であることを示してこそ、英国に対して抵抗しようとする意志を、放棄させる政治的意味がある、と主張したのである。このキャニングの見通しは、ほぼ正しく、ラクノー陥落後、オード各地の反乱は、軍事的に壊滅させられるというよりは、抵抗が断念されて政治的な収束にむかっていった。

以上のようなキャニングの政策を部下の一人は、「彼の施策は、最初は全く実りないもののように見えながら、結果として、豊かなものとなった」と要約している。[28]

しかしながら、このキャニングの政治指導は、当初インド在住の英国人たちに著しく不評であった。彼は、反乱の拡大期に、現地語の新聞とともに、恐怖をあおる英字新聞の検閲に踏切り、そのうえ、カルカッタ住民の武装解除を行う

際、ベンガル人のみならず、英国人もその対象とした。このような一連の措置によって、人種的な憎悪に燃えたインド在住の英国人たちはキャニングに対する強い反感を持つに至った。彼らの目から見れば、キャニングは、インド人に過剰に「御情け深く（クレメンシー）」、英国人たちをないがしろにしているかのように映った。一般の英国人は、先に述べたキャニングの訓令を「御情けの宣言」と揶揄し、キャニングを「御情け深い（軟弱な）キャニング様」（'Clemency Canning'）と蔑称した。そして、キャニングの罷免を求める署名を、ヴィクトリア女王に送るまでに、インド在住英国人の不信感は高まった。この世論やインドの英字新聞の論調は、英本国にも波及した。例えば、雑誌『パンチ』は、血のしたたりおちる剣を持った残忍そうなインド人の頭をなでるキャニングの漫画を掲載し、『タイムズ』紙は、彼の訓令を「馬鹿げた（シリー）宣言」と呼んだ[29]。さらに、英本国の政治家たちの中でも、キャニングに対する批判が高まった。そのうえ、キャニングをインド総督に任命した首相パーマストン（Henry John Temple, the 3rd Viscount of Palmerston）は、反乱発生の第一報がとどいてから、一八五七年一一月までの半年間は、キャニングを支持する公的発言を行わず、また、キャニングにあえて一通の支持の手紙も書かなかった[30]。このように、キャニングの政策は、本国の政権からも世論からも、孤立に追い込まれた。

さらに、パーマストン内閣にかわったダービー内閣のインド統制委員長エレンボロー（Edward Law, the 1st Earl of Ellenborough）が、議会と新聞を通じてキャニングを公けに非難するに至った。

しかし、キャニングは彼に対する世論の批判には全く耳を貸そうとはせず、超越的とさえいえる姿勢を崩そうとしなかった。彼は、多くの人から働きすぎないように、という忠告を受けていたにもかかわらず、早朝から深夜まで執務室に籠って、指導に専念した。とくに、一時期、反乱の中心地域に近く、指導と連絡に便利なアーラバード（Allahabad）に、カルカッタから執務室を移動させ、そこで指揮をとることさえした。彼の訓令は、大局的な判断を目的としている

ものの、作戦の細部にまで立ち入った詳細なものも少なくない。彼の広い執務室の壁には、戦況を示す地図が掲げられ、部屋全体には、ファイルと書類箱が整然と並べられていた。部下たちの回想によれば、キャニングは決断が遅く、訓令や公信の起草は最後の瞬間まで考え抜いた、という。さらに、いったん浄書された手紙に、さらに手を入れ、文章のスタイルにまで気を配った。そのため、書類の作成が遅れがちになり、本国にむけて手紙を運ぶ郵便船は、しばしば、総督の公電一本のために、ボンベイ沖に一日以上も待機させられた[31]。しかし、彼はいったん下した決定は断固として実施し、部下の現場指揮官にも、ロンドンの彼の批判者にも、彼の決定を覆すことを許さなかった。エレンボローが彼に、オードに関する政策の修正を命じた公電を送りつけた時、彼は、ロンドンにおける彼の政策の代弁者グレンヴィルにこう書き送っている。

「私の身体に生ある限り、私はこれまでとってきた政策以外は絶対に採用しない。なぜなら、それらは単に得策であるばかりでなく、正義であるからである。私は怒りの中で統治しない。法と力が許すかぎり、公正な統治を厳正に確固として施していく[32]。」

しかし、インドにおいては、専制君主に比すべき権力者であったキャニングも、ロンドン政界の動向には深く悩まされた。ロンドンでは、議会はもちろん、女王の周辺にもインドに対する対応に関心が高まっていた[33]。にもかかわらず、ロンドンでは、大反乱が発生した後の半年間、インド政策についての合意が形成されなかった。首相パーマストンは、なによりも、大反乱がヨーロッパの国際関係、とりわけ英仏に関係及しうる影響を重視した。即ち、まずナポレオン三世の出方をさぐり、次いで、軍隊への採用年齢制限を緩和するなどの警戒措置をとった。もちろん、彼は、本国や他の植民地からインドへ、軍隊をできるかぎり急派しようと試みたが、それらの大部分は、主要な戦闘が終了する前に戦場に到着することはなかった[34]。

しかも、英本国でインド政策に責任を負うべき英国議会は、一八五七年秋より一年余という最も重要な時期に、諸党派の関係が錯綜し、政治決定は著しく不安定化した。ディスレイリーの「多数派の形成の仕方、神のみぞ知る。投票結果の背景、神のみぞ知る」[35]という嘆きは、この議会の流動性を物語るといえよう。この間に、内閣も、インド政策を担当する大臣も、ともに交代した。その結果、インドと本国の間の通信は大混乱に落ち入り、キャニングは、自分をインド総督に選出したパーマストン内閣が崩壊したことを、約一カ月半も知らずにすごした。また、パーマストン内閣にかわって成立した、ダービー内閣のインド統制委員長にはエレンボローが就任したが、彼は前任者の公信記録を見ないまま、政策の変更を求める訓令を、キャニングに送付する有様であった。インド政策は、議会における党派間の駆引の材料となり、誤報や噂話が議会の周辺を支配した[36]。インド総督の更迭が噂され、ダービー内閣の大蔵大臣ディスレイリーが、東インド会社を廃止した後に新たに設けられるインド副王兼総督の地位に関心を示していたことは、当時の政界の常識であった[37]。

ロンドンでは問題は、チャールズ・キャニングという人物を、英国の支配層が信任するか否かに絞られた。ここで、最も大きな重みを発揮したのは、支配層内部におけるキャニングの人的な信頼関係に他ならない。彼の親友グレンヴィルは、キャニングの在任中を通じて彼と定期的に手紙をかわしていたが、議会において終始キャニングの政策を擁護し、彼に対する批判に逐一反論を加えた。実際、内閣の交代によって、ロンドンとインド総督との交信が不安定化した中で、グレンヴィルがキャニングから受けとる本来は非公式なはずの情報も、重要性を増していった。当時、ヴィクトリア女王とアルバート公の寵臣であったグレンヴィルは、まず王室のキャニング支持をとりつけることに成功した[38]。さらに、ピール党の指導者たちも、キャニング擁護の論陣を張った。当時保守党の首脳に近かったグレアム（James Graham）は、「クライヴ（Robert Clive）が勝ち取り、ウェルズリー（Richard Colley Wellesley）が確保したものをキャニング

は失わない[39]」と、インドにおける英国人の英雄と並べて、キャニングへの信頼を表明した。また、グレイ (Henry George Charles, the 3rd Earl of Grey)、ジョン・ラッセル (John, the 1st Earl of Russell)、シャフツベリー (Anthony Ashley Cooper, the 7th Earl of Shaftesbury) など、キャニングが予期しなかったような人々から、彼に対する支持が表明された。そして議会では、一転してエレンボローの側のミスが攻撃されるに至り、キャニングへの非難はそれ以降、陰をひそめていくことになった。

ディスレイリーは、当時、「すべての人間は、各々に行政を実施する。しかし、その成否を決定するものは、人間の作為をこえた力 (a Power) なのである[40]。」と述べているが、キャニングがロンドンで支持者を得て肯定的な評価を受けることができた前提条件は、彼が英国の支配層の不可欠な一部をなしていたことであった。

(1) Maclagen, op. cit., p. 4 & passim.
(2) *Ibid.*, p. 84.
(3) Morris, James, *Heaven's Command: An Imperial Progress*, (Harmondsworth, Penguin, 1979) pp. 244–45.
(4) Canning to Victoria, 25 Sept., 1857. Benson, Arther C., (ed.), *The Letters of Queen Victoria*, (New York, 1907) Vol. III, p. 319 に収録。
(5) Canning to Vernon Smith, 19 May, 1857. Maclagen, op. cit., p.86–87 に収録。
(6) *Ibid.*
(7) Canning to Granville, 11 Dec., 1857. Fitzmaurice, op. cit., Vol. I, p. 273–77 に収録。
(8) Canning to Vernon Smith, 3 July, 1857. Maclagen, op. cit., pp. 110–11 に収録。
(9) Canning to Granville, 11 Dec., 1857, 註 (7) に同じ。
(10) *Ibid.*
(11) A Volunteer, [pseud.] *My Journal or What I Saw and Did between 9th June and 25th November, 1857*, (Calcutta,

1858) p. 24. Pemble, op. cit., p. 179 に引用。

(12) Duff, Alexander, *The Indian Rebellion*, (London, 1858) p. 255. Metcalf, 1965, op. cit., p. 99 に引用。

(13) Lee Warner, William, *Life of the Marquis of Dalhousie*, (London, 1909) Vol. II, p. 404. Pemble, op. cit., p. 176 に引用。

(14) Mason, Philip, *A Matter of Honour: An Account of the Indian Army, Its Officers and Men*, (Harmondsworth, Penguin, 1976) p. 294 参照。

(15) *Ibid.*, p. 291 に引用。

(16) *Ibid.*, p. 294 に引用。

(17) 'Resolution of the Government of India,' 31 July, 1857. (The 'Clemency' Resolution) Maclagen, op. cit., Appendix II に全文が収録されている。

(18) Canning to Granville, 11 Dec., 1857. 註 (7) に同じ。

(19) インドの軍事情勢については Sen, Surendranath, *Eighteen Fifty-Seven* (The Publication Division, Government of India, 1957) Ch. 9 参照。

(20) Lawrence to Canning, 10 July 1857. Maclagen, op. cit., p. 112. に収録。

(21) Canning to Lawrence, 15 July, 1857. Maclagen, op. cit., p. 112–13. に収録。

(22) *Ibid.*

(23) *Ibid.*

(24) Pemble, op. cit., pp. 223–25.

(25) Canning to Campbell, 29 Dec., 1857. Maclagen, op. cit., p. 151. に収録。

(26) Canning to Campbell, 8 Jan., 1858. Pemble, op. cit., p. 223. に収録。

(27) Canning to Campbell, 29 Dec., 1857. 註 (25) に同じ。

(28) Temple, Richard, *Men and Events of my Time in India* (London 1882) p. 183. Maclagen, op. cit.,p. 312 に引用。

(29) '*Punch*' 24 Oct. 1857. '*The Times*' 21 Oct., 1857. Maclagen, *op. cit.*, p. 135, p. 138 参照。

(30) Bell, Herbert C. F., *Lord Palmerston*, (London, Longmans, 1936) Vol. II, pp. 174-75. Ridley, Jasper, *Lord Palmerston*, (London, Constable, 1970) pp. 475-78.

(31) Maclagen, op. cit., pp. 163-65, 310-17.

(32) Canning to Granville, 11 Dec., 1857. 註（7）に同じ。

(33) ヴィクトリア女王は、インドの情勢に憂慮を示し、首相パーマストンは女王に「反乱の勃発は、英国の（インド）統治のより強固な確立につながるでありましょう」という気安め手紙を書かなければならないほどであった。Bell, op. cit., p. 137.

(34) *Ibid.*, p. 173.

(35) *Ibid.*, p. 176.

(36) これには、イギリスとインドの間の情報距離の大きさを考えに入れなければならない。この当時の交信記録を見ると、英本国からインドへの至急電報は、まずロンドンからマルタに電送され、マルタから海路スエズに運ばれ、次いで陸路紅海に送られ、再度海路ボンベイに運ばれて、そこから総督のもとに電送された。このようなルートをたどる至急電報でも、通常二週間程度の日数が必要であり、船便の接続が悪いなどの理由から三～四週間かかっているものさえ見られる。とすると、たとえ至急電報で交信したところで、最短時間でも往復に四～五週間かかることになる。

(37) Monypenny and Buckle, op. cit., Vol. IV, pp. 176-77.

(38) Ridley, op. cit., p. 641.

(39) Granville to Canning, 26 Aug. 1857. Fitzmaurice, op. cit., pp. 257-58.

(40) Monypenny and Buckle, op. cit., Vol. IV, p. 158.

The Official Mind of Imperialism :

Charles Canning and the Indian Great Rebellion (1)

Ken'ichi NAKAMURA*

Charles Canning, born in 1812, as a son of George Canning was appointed as the Secretary-General of India in 1856. He faced the Indian Great Rebellion, one of the most serious crises of British Empire in the 19th century. He could successfully win against the rebels as well as his enemies in and outside of Indian Government, such as outrages of English Press, criticism of Parliament and that of the Establishment.

Throughout his rule, he showed his prudence to tranquilise Indian minds and his calm confidence to re-establish the stability of British rule.

Chapter 1 is a sketch of the family and education of Charles Canning, which built up his leading traits of ruler. Though his father George Canning had a powerful influence over the son, the father and the son were different in character ; father George, a man of vehement, and a great speaker in the public, son Charles, a man of remarkable accuracy with the power of continuous work. And Charles Canning was very much helped by the fame and personal relations his father established. While George Canning had to struggle by himself against the invisible pressure of the Establishment.

Chapter 2 is focused upon his leadership in the process of the suppression of the Rebellion. While hostility to the Indians among the white community grew to racial animosity, Charles Canning understood whether or not the British rule could be restored depended upon the goodwill of the Indian people. He dispatched so called "the 'clemency' resolution" which prohibited British military from revenging indiscriminately. Though he was surrounded by resentments, criticisms and outrages of the public opinion both in Calcutta and London, he managed to persuaded that his policy was the only choice to make the British rule survive in India.

* Associate Professor, Faculty of Law, Hokkaido University.